

第十一回福島原発事故による長期影響地域の生活回復のためのダイアログセミナー
「測定し、生活を取り戻す」

日時：2015年5月30・31日（土・日）
会場：杉妻会館（福島市杉妻町3-45、Tel: 024-523-5161）
<<http://www.sugitsuma-kaikan.com/>>

発起人

国際放射線防護委員会（ICRP）

協力と後援

日本財団

放射線安全フォーラム

福島のエートス

伊達市、福島県立医科大学

フランス放射線防護・核安全研究所

ノルウェー放射線防護局

フランス原子力安全局

経済協力開発機構・放射線防護公衆衛生委員会、

同時通訳

株式会社ヒラノ（平野加奈江、町田公代）

会合関連サイト

ICRP 通信：<http://icrp-tsushin.jp/>

福島のエートス：<http://ethos-fukushima.blogspot.jp/>

第11回ダイアログセミナーの目的

第11回ダイアログセミナーは、「測定し、生活を取り戻す」のテーマで開催します。福島第一原発事故では、原発から放出された放射線が、人々の日常に侵入しました。健康影響をもたらすと言う放射線は、眼にも見えず匂いもないため、人々にとって実体が不明な存在です。実体が不明でかつ危険とされる存在が遍満するなかで、対抗する手段を持たない人々は、混乱し、自信を失います。そして、これまで美しく豊かで住む人々の誇りであった福島での生活は、変貌してしまいました。

しかし福島ではこの事態を直視した人々も居られ、それらの方々は、放射線の実体を知る努力を開始しました。これはとりもなおさず放射線を測定することでした。これらの方々は、ご自分で、あるいは専門家の協力を得て、日常を取り巻く様々な場や時間での放射線を測定し、自分の日々受けている放射線を測定し、食品の放射線を測定し、食品から取り込んだ自分の体内の放射線を測定しました。

これまで実体の見えなかった放射線は、測定することで具体的な姿を現します。そして測定で明らかになった数値は、専門家と共有でき、また仲間と共有することができます。この活動により自分を取り巻く放射線の状況を理解すると、その状況に対して主体的な対応が可能になります。すなわち、恐れ惑い避けるだけしかできなかった放射線状況は、理解できると対応も可能になり、状況に対して主導権を取ることができます。すなわち放射線の測定により、人々は影響を受けた地域で生活を取り戻すことができるのです。

このようにして人々が放射線を測定することは、単なる作業以上の意味を持っています。今回は、放射線にたいする前向きな活動としての測定を取り上げ、これが分断の中でどのように人々をつなぎとめたかについて学び、対話を行います。

同時通訳

英語と日本語の同時通訳をイヤホンで聞くことができます。

その他

昼食は弁当が用意されています。

30日の夕方は、杉妻会館4階の会場にてレセプションを行います。ご自由に参加ください。

プログラム

第1日目 5月30日（土）

9:00-9:30 開会

全体司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)
多田順一郎（福島、放射線安全フォーラム）

挨拶

ICRP 委員 ジャック・ロシヤール

自己紹介

国内・海外参加者の自己紹介（各自1分で名前、専門、経験などを話す）

9:30-14:10 セッション1 発表：測定し取り戻す

専門家による測定の話（40分）

早野 龍五（東京大学）：いろいろな放射線の測定（20分）

吉田 浩子（東北大学）：家屋内の放射線測定（20分）

行政と住民によるいろいろな測定活動（100分）

内藤 航（産総研）：個人線量の実態と将来を知るための測定（20分）

菅野 クニ（飯舘村）：生活を取り戻すための測定（20分）

半澤 隆宏（伊達市）：伊達市を取り戻すための測定（20分）

菅野 幸雄（環境ワーキンググループ伊達）：伊達市を取り戻すための測定（20分）

渡辺 香織（伊達市）：生活を取り戻すための活動（20分）

12:00-13:00 昼食

弁当の用意があります。

13:00-14:10 セッション1 発表：測定し取り戻す

集団を測る（20分）

野中俊吉（コープ福島）：コープ組合員の個人線量を測る（20分）

高校で測る（30分）

原 尚志（福島高校）：高校での測定（30分）

小野寺悠（福島高校）

小川葵（福島高校）

菅野翔佳（福島高校）

齊藤美緑（福島高校）

藤原祐哉（福島高校）

安齋彩季（福島高校）

カリフォルニアで測る

カイ・ベッター（カリフォルニア大パークレー校）：

カリフォルニアにおける人々の懸念、測定、そしてダイアログ（20分）

14:10-16:40 セッション2 対話：ステップ1—測定し取り戻す

司会：ジャック・ロシヤール（フランス、ICRP、CEPN）

報告担当：ジャンフランソア・ルコント（フランス、ICRP、CEPN）

ステップ1の進め方：

ステップ1で対話参加者は設問に対する回答を2回行う。

初回は自分の意見を述べる。

次回は他の方々の意見を聞いたあとで、自分の意見を述べる。

パネル討論参加者（24名）

早野 龍五（東京大学）
吉田 浩子（東北大学）
内藤 航（産総研）
菅野 クニ（飯舘村）
菅野 元一（飯舘村）
菅野 宗夫（飯舘村）
半澤 隆宏（伊達市）
菅野 幸雄（環境ワーキンググループ伊達）
渡辺香織（伊達市）
大槻真由美（伊達市）
野中俊吉（コープ福島）
原 尚志（福島高校）
小野寺悠（福島高校）
小川葵（福島高校）
菅野翔佳（福島高校）
齊藤美緑（福島高校）
藤原祐哉（福島高校）
安斎彩季（福島高校）
門馬麻衣子（末続）
安東 量子（いわき）
津田和俊（海ラボ）
小松 理虔（海ラボ）
富原聖一（アクアマリンふくしま）
宮崎真（福島医科大学）
大森 真（テレビユー福島）
早川正也（民報）
菊池 克彦（民友）

16:40 – 17:00 休憩

17:00 – 17:30 報告担当者によるまとめと総合討論

司会：ジャック・ロシャール

報告担当：ジャンフランソア・レコンテ（フランス、IRSN）

17:30 第一日目終了 牡丹の間の前のロビーで待機、

18:00 – 20:315 レセプション 牡丹の間

レセプションは参加無料です。ぜひご参加ください。

第2日目 5月31日(日)

9:00-9:20 開会

全体司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)
多田順一郎(福島、放射線安全フォーラム)

自己紹介

新規参加者の自己紹介(各1分で名前、専門、経験などを述べる)

9:20-12:30 セッション3 発表：生活を取り戻す(150分)

未続を取り戻す(60分)

門馬 麻衣子(いわき)：相談員としての測定へのかかわり(20分)

安東 量子(いわき)：測定と測定値の扱いについて(20分)

宮崎 真(福島医科大学)：測定で自由を取り戻す(20分)

食を取り戻す(40分)

村上 道夫(福島医大)：飲み物と食べ物の公表データからわかること(20分)

五十嵐泰正(筑波大学)：柏市でのとりくみ(20分)

海を取り戻す(60分)

津田 和俊(海ラボ)：市民科学者としての挑戦—山へ、川へ、そして海へ(20分)

小松 理虔(海ラボ)：海で測る(20分)

富原 聖一(アクアマリンふくしま)：海で測る(20分)

飯館で農を取り戻す

菅野宗夫(飯館村)：農業を取り戻すための測定(20分)

12:30-13:30 昼食

弁当の用意があります

13:40-14:00 セッション4 発表：ノルウエーでの測定(30分)

ラブランド・スクテリード(ノルウエー放射線防護庁)：

サーミとトナカイの放射線線量測定(20分)

14:10-16:20 セッション5 対話：対話：ステップ2—測定し取り戻す

司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)

報告担当：テリー・シュナイダー(フランス、CEPN)

ステップ2の進め方：

ステップ1で対話参加者は設問に対する回答を2回行う。

初回は自分の意見を述べる。

次回は他の方々の意見を聞いたあとで、自分の意見を述べる。

パネル討論参加者

早野 龍五(東京大学)

村上 道夫(福島医大)

内藤 航(産総研)

菅野 クニ（飯舘村）
菅野 元一（飯舘村）
菅野 宗夫（飯舘村）
半澤隆宏（伊達市）
菅野幸雄（伊達市、環境ワーキンググループ伊達）
野中俊吉（コープ福島）
門馬 麻衣子（末続）
安東 量子（いわき）
遠藤 眞也（いわき）
五十嵐 泰正（筑波大学）
津田 和俊（海ラボ）
小松 理虔（海ラボ）
富原 聖一（アクアマリンふくしま）
宮崎 真（福島医科大学）
大森 真（テレビユー福島）
早川 正也（民報）
菊池 克彦（民友）

16:20 – 16:50 休憩

16:50 – 17:20 報告担当者によるまとめ

報告担当：テリー・シュナイダー

17:20 – 17:30 閉会

全体のまとめ（10分）

テッド・ラゾ（フランス、経済開発機構）

閉会の挨拶

ジャック・ロシャール

これまでのダイアログセミナー

国際放射線防護委員会（ICRP）は、長期汚染地域居住地域住民の防護に関する勧告において、汚染地域の住民と専門家が状況の対応に直接関与することが効果的であること、および国や地域の行政は地域住民が自ら決定しうる状況を作りだし、その手段を提供する責任があることを強調している。

この観点に基づき、ICRPは、2011年秋以来、会合を開催し、福島県の代表、専門家、地域住民の方々、およびチェルノブイリ事故について経験を有するベラルーシ、ノルウェー、フランスの関係団体からの代表などが、福島原発事故の影響をうけた地域の長期の回復に対する挑戦についてその方策をさぐるためのダイアログセミナーを行った。

2011年11月の第一回ダイアログセミナーは、ステークホルダーによる影響をうけた地域とそこでの懸念についての討論の促進を行った。

2012年2月の第二回ダイアログセミナーでは、福島県の地域住民の状況と問題に焦点を当て、状況の理解の進展と、汚染地域の回復に向けた経験の共有することの価値を認識した。人々は、状況についての懸念を表明した。

2012年7月の第三回ダイアログセミナーは、とりわけ困難な食品汚染の問題について、異なる要求をもつ消費者、流通業者、生産者に来ていただき、食品の品質の改善と消費者の信頼獲得にむけて議論した。

2012年11月の第四回ダイアログセミナーでは、これまで3回のダイアログを通して得た理解を踏まえ、子どもの教育を取り上げた。参加者は放射線防護の備えの重要性を強調し、線量測定が個人個人の放射線状況を把握する重要な道具であると認識した。事故の記憶と経験は、その困難においてのみならず、積極的な側面もあることが認識された。

2013年3月の第五回ダイアログセミナーは、「帰還」を取り上げた。帰還する、しないの決断は、単に放射線状況のみならず、長期汚染を受けた地域での生活の全ての状況を考慮してなされる。帰る・帰らない、留る・去る、の選択肢どれも困難を伴う。また決めかねている間に状況は刻々と変化する。この複雑で困難な問題について、幅広い関係者、組織、住民、教師、医師、行政、チェルノブイリ経験者が一堂に会し、立場の違いを越えて、汚染地域の困難な状況に前向きに立ち向かうために共有すべき価値を探った。

2013年7月の第六回ダイアログセミナーでは、「飯舘」の人々が直面する現状と挑戦を取り上げた。2日間の熱心な議論を経て、4つの勧告がまとめられた。それらは異なる見解を表現することに敬意をはらい、情報の交換を助け、自ら定めることを推進するダイアログの場を作る。村民、研究者、専門家が協力して住民のためのプロジェクトを推進するための枠組みを確立する。除染の優先順位を定め、村民の被ばく低減に有効な他のすべての可能な方策について検討する。ご高齢の方々が飯舘に帰るか帰らないかを自ら決断するための状況を可能な限り速やかに作り上げる。

2013年11月の第七回ダイアログセミナーは、いわきと浜通りの人々が専門家と共におこなった自助活動に焦点を当てた。本ダイアログは、これまでと違って、人々やコミュニティが、専門家の指導のもとにどのようにして身近の環境を理解しその状況をコントロールする活動に取り組んだかについての一連の証言が発表された最初のもので

あった。発表や討論を通じて、これまでのダイアログの勧告にある個人線量の測定、自助による防護、経験の交換、人々やコミュニティーの必要に応じた専門知識の役割、などを実際の場で役立てることができ、しかもそれが住み慣れた地域でまともな生活を送るため、人々を支援する上で効果的であることが明らかになった。

2014年5月の第八回ダイアログセミナーは、地震、津波、原発事故の3重の災厄に見舞われた南相馬市に焦点を当てた。南相馬市は、警戒区域、屋内退避区域、指定のない区域に三分され、かつ指定の無い区域にも特定避難勧奨地点が散在する。この極めて複雑な放射線状況の中で、住民の間での情報と理解の共有は極めて困難である。当初市民の9割が避難した。そして人口の5割程度までは戻った現在でも、家族内で別れて避難を継続する人々は少なくない。そのなかで放射線に対する不安と政府・専門家に対する不信は今も人々の心の奥底にある。このような中で、一部の人々は、自ら、また外部専門家等の支援を受けつつ、地域の放射線状況の理解と改善、復興のためこれからの30年を見通した活動を開始している。

2014年8月の第九回のダイアログセミナーは、「福島で子どもを持つ」というテーマで開催した。本会合では、放射線が福島の人々の日常のなかで、子育てに大きな影響を与えていることを取り上げた。放射線は、子供の健康影響のみならず、母親の心にも大きな影を落としている。子供の健康への懸念から県外へ避難する方がおられる一方で、子供の心身面での健康と家族の絆を重視する観点から、あえて福島での子育てする判断した方もあり、さまざまな局面から対話がなされた。会合には、子育ての悩みを持つお母さん、保育所・幼稚園心理関係者、それに大学等の研究者、さらに報道関係者や自治体・国の行政担当者などの参加があった。

2014年12月の第十回のダイアログセミナーは、「伝統と文化」というテーマで開催した。「福島における伝統と文化の価値」のテーマで開催する。福島原発事故では、放射線が人々の日常生活に侵入した。その放射線については、健康影響に関するさまざまな意見が氾濫し、政府の対応も混乱を極めた。これは、放射線の健康影響についての判断について人ごとに異なる状況をもたらした。その結果、夫婦、家族、コミュニティーなどあらゆるレベルでの分断が生じ、今に至っている。しかしこの状況にあってもなお人々が共有できるものに伝統や文化がある。伝統と文化は、守り育て受け継ぐものであり、これは、分断された状況のなかでも人々が共有し得るものである。そしてこの共有は人々をつなぐ。文化や伝統には、祭のような華やかな非日常の活動の中で保たれ、また野良仕事や食生活など生活の片隅の中にも今日まで息づいている。さらに伝統には古くから守られてきたものもあり、文化の中には現在も育ちつつあるものもある。今回のダイアログでは、放射線による分断の中でなお人々をつなぐものを学び、伝統や文化が復興にもつ意味について対話を行う。